

「科研費と研究」私と科研費（2010年10月号）

垣生 園子

順天堂大学医学部免疫学教室 教授



<研究環境と科研費>

私が科研費の有り難みを身にしみて判ったのは、他の研究者に比較して遅れていたようである。言い換えれば、恵まれた環境で研究を開始した。

英国で免疫の研究を始めた私には、帰国に際して免疫研究を続ける“実家”はなかった（当時、日本の大学には免疫学講座は無かった！）。免疫反応の主役である T リンパ球の発生組織である胸腺の研究を進めていた先輩が、私の研究に深い理解を示してくださり、彼の担当する病理学講座に職を得た。そこでは自分の研究課題を進めることができた上に、科研費の有無や額には関係なく、研究に要する経費はあまり心配しないで過ごせた。当時は、大学の講座費が現在に比べて多かったことに加え、免疫研究に用いる試薬や材料は研究室レベルで準備することが多く、時間はかかるが経費のかからない時代的背景もあった。

日本での研究開始に当たり、もう一つの幸運があった。帰国前日にご挨拶に伺ったロンドンの大ボス宅で、日本の免疫研究者と親しい米国の研究者に偶然出会い、帰る“実家”のない私は、免疫研究を精力的に進めている研究者を紹介された。おかげで、当免疫学者が統括していた領域研究のシンポジウムにおいて、私のロンドンでの研究成果を発表する機会が与えられた。それを機に免疫研究領域のグループへの参加が認められ、黎明期の免疫研究に情熱を燃やす優れた研究者からの励ましや批判の恩恵に浴することができた。研究費の支援にも増して嬉しいことであった。領域研究かの報告会や懇親会での議論では、一研究室に留まっていたでは得ることができない unpublished data や新しい研究手段の情報を得る機会があり、人脈ネットワークと共に駆け出しの研究者にとって貴重な財産となったと確信している。日本独自の領域研究制度には一部弊害も指摘されているが、それでもプラスの部分の方が大きく、より良く改善しながらの継続を望むところである。

< 科研費申請への姿勢 >

この後、新設の細胞生物学教室に移った。病理学教室では研究・教育の他に病理解剖と組織診断という業務が課せられている。そのために研究時間を裂かれるのが苦痛となったのが理由である。米国から赴任した新教授の元で独立して自分の研究を続けるためには、すべての研究費を自力で賄わねばならず、これまでは大学のスタッフとしての義務あるいはstatusとして頂いていた科研費が、自由な研究遂行には不可欠な原資であることを実感した。もともと、昨今の運営交付金減少による研究環境と比較すると、切実さの度合いは低かったであろうが。この細胞生物学教室での経験を通して、自ら温めてきた研究課題の解明に向けて如何に科研費を配分・利用するかを学び、後に研究室を担当する際の良い準備となった。

科研費の申請を書き始めた頃、“作文能力が乏しいと、良い科研費申請書は書けませんね。”と言って、ある高名な研究者にお叱りを受けたことがある。“自分が知りたい疑問への乾きにも似た探求心が感じられない研究提案書は、いかにレトリックに長けた文章を書き上げて、所詮作文の域を出ない。科研費への提案書は研究者の全知全能を傾けて創り上げた“作品”であって、作文ではない“と。この指摘は文学的ではあったが、痛烈に響いた。研究というのは目指す課題を設定し、それを解き明かすための道筋を選択・修正しながらのプロセスの総合であり、まさに“作品”創りと言える。科研費の提案は数年で成果を求められているが、目指す研究の一端を担っていることに変わりはなく、同じ姿勢で取り組むべきである。書き方の技巧に走ったことをいたく反省した。以後、科研費申請書を書く時あるいは審査する時は、“作品”という二文字を肝に銘じて取り組むこととしている。

< 科研費の審査 >

最後に、科研費申請の審査に関与してきた経験からの感想を一言述べたい。色々批判もあるが、文科省における科研費採択方法は総じて健全である、と言うのが大型研究費のピアレビューに参画した印象である。例えば、特定領域や特別推進研究では、10-20人の審査員が40-50の申請書を査読してtentativeな評点を付し、その評価値を基に相当時間を掛けた意見交換によってヒアリング課題を選択する。第二段階では、審査員以外に依頼した専門家の意見書を参考に、ヒアリング採択者の提案説明に対する質疑応答後、採択課題を巡って再度熱の入った討論が展開される。初めてこの2つの議論に参加した時、積極的に将来性のある研究を伸ばすべく採択しようとする審査員の真摯な態度と討論に感銘を受け、膨大な提案書を査読した苦しみも吹っ飛んでしまった。また、最

終審査に残った研究提案には質の高いものが多く、採択課題決定後忸怩たる思いが残り、審査員間で科研費採択制度について夜遅くまで議論したこともあった。このように、公平かつ真剣な議論に基づくピアレビュー制度は優れた研究の発展を支えているが、一方では、膨大な数の提案書査読と複数段階の審査会での長時間の討議は、審査を担当する研究者を疲弊させ、ひいては日本の研究レベル低下の危険を孕む。審査員への負担を軽減する方策の検討を望む。